

| | |
|-------------|---|
| 科目名 | 人間論A(人文・社会科学) |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 教授 柿木伸之 |
| 履修時期 | 前期 |
| 履修対象 | 博士前期課程在学者 |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | 人間とは何か。この問いは古代ギリシア以来、ヨーロッパの思想史において中心的な問題の一つであり続けてきました。また、ルネサンスにおける「人間」の再発見以来、「人間らしさ」の実現は、文明の発展の目標とされてきました。しかし、今日人間とは何かと問う際に、文明の発展史において想定されてきた「人間」像が、歴史的に作られたものであることを、さらにその歴史が、「人間らしさ」とされてきたものを破壊し、人間自身の生命を根幹から脅かすに至ったことを、けっして忘れることはできません。今や「人間」は、それを想定することの可能性を含めて、根底から問いただされるべき概念と化しています。本講義では、こうした現代の問題意識を踏まえつつ、ヨーロッパの思想史のなかで「人間」がどのように捉えられてきたかを検討することをつうじて、今人間とは何かを問う糸口を探っていきます。 |
| 科目の到達目標 | 人間とは何かとみずから問い、それをつうじておのおのの専門的な営為の位置と意義を見つめ直す、思考の契機と素材を得ることが、本講義の目標とするところです。 |
| 受講要件 | 日常生活の前提を掘り崩すことを怖れることなくみずから徹底的に問い、考えることに面白さを覚え、講義のなかに答えではなく、自分の問いを見いだそうとする姿勢が、受講の要件です。 |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | 今年度の講義はオンラインで実施しますので、各回の講義に関する情報を、必ず事前にWebClassの本講義のページで確認してください。本講義では、各回の講義の後で、内容を振り返るとともに、紹介された文献を手にとって問題意識を深めることが求められます。それを前提に成績評価を行いません。 |
| 講義内容 | 以下の流れを予定しています。受講者と相談のうえ、内容などを変更することもあります。 第1回: イントロダクション——人間、この問われるもの(フリーモ・レーヴィ、石原吉郎) 第2回: 死すべき者としての人間(古代ギリシアの人間観) 第3回: ロゴスを持つ動物としての人間(アリストテレスとストア派の人間論) 第4回: 神の似像としての人間(キリスト教思想の人間論) 第5回: 人間らしさの発見(ルネサンスの人文主義) 第6回: 知性にして機械としての人間(啓蒙主義の人間論) 第7回: 自律としての人間性(カントの人間論) 第8回: 歴史において自由を実現する人間(ヘーゲルとマルクスの人間論) 第9回: 神なき世界の人間(ニーチェの人間論) 第10回: 作る人、遊ぶ人、描く人(ホイジンガ、ヨーナスらの人間論) 第11回: 哲学的人間学の展開(シェラー、プレスナー、ゲーレンの人間学) 第12回: ヒューマニズムとその先(サルトル、ハイデガーの人間論) 第13回: 活動する人間(アーレントの『人間の条件』) 第14回: 「人間の終焉」の後に(フーコー、レヴィナス、アガンベンらの人間論) 各回は主にスライドを用いた講義のかたちで進められます。 |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | 講義への参加度(50%)と文献研究の成果(50%)を総合して評価します。講義への参加度は、基本的には各回の講義で考えたことをひと言記すコメントの内容にもとづいて評価することになりますが、受講者数などに応じて別の方法の導入も検討します。文献研究として、講義で紹介した参考文献のうち一冊についての2000字以上の書評を課します。これは学期末に提出していただきます。 |
| 教科書等 | 教科書は使いません。参考文献を講義のなかで随時紹介します。 |
| 担当者プロフィール | 研究の専門領域は、近代および現代のドイツ語圏の哲学と美学。近年はとくに、20世紀前半に批評家として、また類いまれなエッセイストとして活動したヴァルター・ベンヤミンの思想に強い関心を持って取り組んでいます。著書に、『ヴァルター・ベンヤミン——闇を歩く批評』(岩波新書、2019年)、『パット剝ギトツテシマッタ後の世界へ——ヒロシマを想起する思考』(インパクト出版会、2015年)、『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』(平凡社、2014年)などがあります。翻訳書に、『細川俊夫 音楽を語る——静寂と音響、影と光』(アルテスパブリッシング、2016年)があります。 |
| 授業に関連する実務経験 | 特になし。 |
| 備考 | |

| | |
|-------------|---|
| 科目名 | 人間論B(自然科学) |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 非常勤講師 戸田山 和久 |
| 履修時期 | 前期(集中講義) |
| 履修対象 | 博士前期課程1、2年生 |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | 人間も煎じ詰めれば、物理法則に従う素粒子の集まりにすぎません。一方で、日常生活では、われわれは「心」をもち「意味」を理解し、「自由意志」にもとづいて行為する、ただの物質を超えた存在として。人間を理解しているように見えます。こうした二つの人間観をどうやって調和させたらよいのかを考えます。 |
| 科目の到達目標 | 「心」の特質について、どのようにしたら科学的に理解できるのか。そのための諸概念と理論を身につけ、人間について深く考えることができるようになる。 |
| 受講要件 | 特にありません |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | 集中講義ですので、毎日の終わりに、考えてもらうための小さな課題を課します。また、レポート作成には十分な時間をかけて、授業の事後学修となるように参考文献等を提示します。 |
| 講義内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・デカルト的二元論と心身問題 デカルトの問題はわれわれ自身の問題でもあること ・哲学的行動主義の理論的利点とその困難 ・心と脳の同一視は思ったほど簡単なことではないこと ・現状では最も説得力のある理論としての機能主義 チューリングマシンと心 ・機能主義では解くことのできない二つの謎 クオリアと意味 ・物理的システムが「意味を理解する」とはいかなることか 目的と機能を自然化する ・クオリアとは何か それがなぜ自然化を拒むのか ・心の科学的理解に向けて ・まとめ |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | レポートによって総合的に評価する。評価基準は「広島市立大学成績評価に係るガイドライン」による |
| 教科書等 | 参考書: 戸田山和久『哲学入門』ちくま新書 |
| 担当者プロフィール | 専門は科学哲学です。どんなことを考えている人間かは上記の『哲学入門』を読んでください。 |
| 授業に関連する実務経験 | なし |
| 備考 | |

| | |
|-------------|--|
| 科目名 | 国際関係と平和 |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 吉川 元 |
| 履修時期 | 後期 |
| 履修対象 | 特に指定なし |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | 授業形態: 講義形式。20世紀初頭から今日に至るまでの国際平和と国際安全保障の実現に向けた国際社会の取組みについて講義します。難民は6000万人を超え、世界各地で自由化は後退し、民主化も滞っています。東アジアの国際関係は過去、最も緊張しています。世界はどれだけ平和になったのでしょうか。どれだけ安全になったのでしょうか。国際社会の平和への取り組み、および安全保障政策とその諸問題の分析を通して、今日の平和と安全保障の危機の構造を探ります。 |
| 科目の到達目標 | 戦争と平和の歴史をたどりつつ、平和観と安全保障観の変容について知識を習得するとともに、平和観と安全保障観の変容が国際関係の仕組みや国際政治システムの変容に与えた影響について理解を深める。 |
| 受講要件 | 特になし |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | テキストを事前に読み、質問を用意する。 |
| 講義内容 | <p>国際平和と秩序は、誰が、いつ、どのように確立するのでしょうか。戦争は無条件に否定されねばなりません。だからといって平和は必ずしも人間の安全を保障するとは限りません。国際関係の歴史を一瞥すれば、平和というものはそのあり方しだいで人間の安全を脅かしてきたことが明らかです。20世紀初頭から今日に至るおよそ百年間に、時の権力者(統治者)による民衆殺戮(人民の大量殺戮)の犠牲者数が戦争の犠牲者数を上回っている事実は、平和が必ずしも人間の安全を保障するとは限らないことを意味しています。平和とは一体、誰のための、何のためのものなのでしょうか。安全保障とは一体、誰の安全の保障なのでしょうか。こうした疑問を紐解くために20世紀から今日に至るまでの戦争様式の変化、国際平和と秩序の変容、安全保障概念の変容について、その歴史をたどります。同時に、戦争原因を国際政治システムに内在する矛盾のみならず、統治システム(ガバナンス)に内在する矛盾にも見出し、また民衆殺戮の原因をガバナンスと国際政治の相互作用に見出し、国際平和と人間の安全保障の双方の実現を目指す平和創造の方法について考察します。</p> <p>【授業内容】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 平和とは何か、誰のための安全保障か(序論) 2. アナーキカル社会の組織化 3. 第一次世界大戦と立憲主義的国際秩序 4. 平和主義の1920年代 5. 危機の1930年代 6. 第二次世界大戦と民族強制移動 7. 戦争の裁きと平和秩序の再編 8. 欺かれた人権尊重の平和 9. 帝国主義の終焉と人民の戦争 10. 人民を抑圧する人民の政府の論理 11. 人間の安全を脅かす平和秩序 12. 新戦争とアイデンティティ政治 13. 民主化と民族紛争 14. 再びガバナンスを問い始めた国際社会 15. 安全保障共同体の創造に向けて |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | 平常点及び特別課題(レポート)で評価する |
| 教科書等 | 【教科書】吉川元『国際平和とは何か―人間の安全を脅かす平和秩序の逆説』(中央公論新社、2015年)。 【主要参考文献】吉川元「グローバル化と安全保障パラダイム転換」初瀬龍平・松田哲編『人間存在に国際関係論』(法政大学出版局、2015年); 吉川元『民族自決の果てに』(有信堂、2009年)を参照してください。 |
| 担当者プロフィール | |
| 授業に関連する実務経験 | |
| 備考 | |

| | |
|-------------|--|
| 科目名 | 日本論 |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 准教授 山口えり |
| 履修時期 | 後期 |
| 履修対象 | 博士前期課程1、2年 |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | 諸外国の様々な文物を柔軟に取り入れて、日本独自の文化へと発展させてきた日本の思考について学びます。講義が中心ですが、「日本」をテーマとした作品、文化財と接することも重視します。 |
| 科目の到達目標 | 「日本」における様々な事象は、「継続」・「変容」しながら「形成」され、「発展」している。こうした現象について、学術的に説明できるようになること。 |
| 受講要件 | 各々の専門的な研究の意義を、日本、ひいては世界の中で、どのように位置づけられるのかという、問題意識を持って参加すること。 |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | 授業で紹介する物事・場所のうち、少なくとも一つには直接ふれて、日本ないし日本文化を理解する感性や知識を養うこと。 |
| 講義内容 | <p>第1回 授業の進め方 第2回 講義『日本書紀』編纂1300年 第3回 講義 日本研究の歴史-Eastern Influence- 第4回 講義 日本研究の歴史-Western Impact- 第5回 特別講義「昔の日本人は何を食べていたの? -『延喜式』研究の最新成果-」 第6回 講義「疫病」と日本思想 1 第7回 講義「疫病」と日本思想 2 第8回 展示見学 芸術資料館 第9回 研究報告と討論1 キーワード:「継続」・「変容」・「形成」・「発展」 第10回 研究報告と討論2 キーワード:「継続」・「変容」・「形成」・「発展」 第11回 文化財調査1 第12回 文化財調査2 第13回 研究報告と討論3 キーワード:「継続」・「変容」・「形成」・「発展」 第14回 研究報告と討論4 キーワード:「継続」・「変容」・「形成」・「発展」 第15回 まとめ</p> <p>* 特別講義の日程、芸術資料館の催し、履修者の数、また、日本文化に関する重要な出来事が起きた場合など、シラバスは変更します。</p> |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | 講義への参加度(報告・討論での参加状況も含む)と学期末レポートで評価します。 |
| 教科書等 | 必要に応じて資料を配付します。 |
| 担当者プロフィール | 政治経済学部政治学科で日本思想を学んだ後、文学部および文学研究科で日本文化史を学んできました。歴史の表層から隠れてしまった日本の文化や思想を顕在化させ、それらの蓄積がいかにして形成され、発展してきたのかを明らかにしたいと考えています。拙著『日本古代の祈雨儀礼と災害認識』(塙書房、2020年)参照。 |
| 授業に関連する実務経験 | |
| 備考 | 「研究報告と討論」については、国際学・平和学・情報学・芸術学それぞれの観点から、キーワードにそった口頭発表を行い、講師・学生による討論を行う。履修人数によるが、全講義を通じて1人1回の割り当てを予定している。 |

| | |
|-------------|---|
| 科目名 | 科学技術と倫理 |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 非常勤講師 八重樫 徹 |
| 履修時期 | 前期（集中講義） |
| 履修対象 | 博士前期課程1、2年次 |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | 倫理学の基本を学んだ上で、市民として科学技術とどう付き合っていくのかに重点を置きながら、科学技術にまつわる現代のさまざまな倫理的問題を考える。 |
| 科目の到達目標 | 基本的な倫理学の知識と科学リテラシーを身につける。科学技術の社会への導入について客観的な判断ができるようになる。 |
| 受講要件 | 特になし |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | 事前・事後学修のためのプリントを配布する(課題を課す)。 |
| 講義内容 | <ol style="list-style-type: none"> 1.はじめに 2.倫理学はどのような学問か 3.義務論 4.功利主義 5.徳倫理 6.科学技術(者)倫理は何を問題にしているのか 7.科学とは何か、技術とは何か 8.AI・ロボットと倫理 9.情報技術とプライバシー 10.事故と災害 11.原子力と倫理 12.気候変動と倫理 13.生命技術と倫理 14.科学リテラシーと社会 15.まとめ |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | 各回の授業内課題とレポートで評価する。 |
| 教科書等 | 参考書:石原孝二・河野哲也(編)『科学技術倫理学の展開』玉川大学出版部、2009年。 各回の授業でプリントを配布する。 |
| 担当者プロフィール | 広島工業大学工学部准教授。専門は哲学・倫理学。 |
| 授業に関連する実務経験 | なし |
| 備考 | 参考書の購入は必須ではありませんが、講義内容の理解に役立つので、なるべく入手・参照してください。 |

| | |
|-----------|---|
| 科目名 | 情報と社会 |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 非常勤講師 神野新 非常勤講師 桑原俊 |
| 履修時期 | 前期(集中講義) |
| 履修対象 | 博士前期課程1、2年次 |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | デジタル化、IP化による情報通信技術(ICT)の急速な進化は、IoT、ビッグデータ、AIなどの活用を通じて、電気通信や放送の枠内を大きく超えた社会経済全体に波及しつつある。すなわち、コンピュータ及びそれらを連結するネットワークシステムが重要な社会インフラとなり、私たちの日々の生活や社会情勢、そして企業活動を大きく変革しつつある。本講義ではICTの発展を俯瞰した上で、社会、経済、消費者及び企業行動、国際関係等に与える影響と問題を把握し、今後、どのように問題に対処すれば良いかを検討する。 |
| 科目の到達目標 | 自然科学、社会科学の区分や専攻の枠を越えて、情報化が社会、産業、生活すべての課題解決手段の中核となることを理解し、その応用、発展にいかによりが参画できるのかを考察することができる。 |
| 受講要件 | 特になし |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | 前もって提示された課題について情報収集、考察に努め、その解決に向けた独創的かつ主体的な提案を期待している。 |
| 講義内容 | <p>第1回(神野)全体の講義内容の概説 オリエンテーションとして講義の全体像と各回の概要を解説し、課題図書(資料)の紹介を行う。その上で、講義の進め方や課題報告・討論の方法を説明する。</p> <p>第2回(神野)社会における情報化の進展 IoT、ビッグデータ、AIなどの活用で加速するデータ主導経済が社会変革に及ぼす影響の実態と今後の方向性について概説し、その課題を整理して提示する。</p> <p>第3回(神野)情報通信産業を支える技術、業種、事業者(1) 情報通信産業の発展を支える技術進歩を俯瞰し、同産業を構成する電気通信、放送、ケーブルテレビ、プラットフォームなどの業種区分や市場構造を説明する。</p> <p>第4回(神野)情報産業を支える技術、業種、事業者(2) 情報通信産業を構成する主な事業者の競争と連携の構図について、最新の市場構造の変化に照らして説明する。</p> <p>第5回(桑原)社会における情報化の進展と法制度の課題—名誉毀損を例に 社会における情報化の進展に、法制度がどのように対応しているのか(していないのか)、インターネット上の名誉毀損を例に説明する。</p> <p>第6回(桑原)プライバシー・個人情報保護 プライバシー権とは何か、判例上どのように保護されてきたか、現代的なプライバシー権の課題は何か等について説明する。その上で、プライバシーと個人情報の違い、個人情報保護法の背景、内容、課題等について説明する。</p> <p>第7回(桑原)著作権制度とその在り方 情報化社会における法制度の中で、重要な位置を占める著作権制度に関し、著作権制度の目的、著作権の客体、著作権の主体、著作権の内容、著作権の制限、保護期間、著作権侵害の効果について説明する。</p> <p>第8回(神野)課題についての報告と討論(第1回目) 第4回に提示した課題について報告を求め、講師、学生による討論を行う。</p> <p>第9回(神野)情報化が企業行動、個人行動に与える影響(1) 情報化による企業行動の変化と効率化の実態を説明する。同様に、個人行動の変容についても言及する。</p> <p>第10回(神野)情報化が企業行動、個人行動に与える影響(2) 情報化による企業行動と個人行動の変容が連動することによる作用を正負の側面から分析する。</p> <p>第11回(神野)メディア融合サービスの現状 ネットワーク、プラットフォーム、コンテンツ・アプリケーションの連携が生み出す融合サービスの展開の経緯と現状を説明し、今後の課題について論じる。</p> <p>第12回(神野)課題についての報告と討論(第2回目) 第4回に提示した課題について報告を求め、講師、学生による討論を行う。</p> <p>第13回(神野)情報化による社会的問題の解決(1) 少子高齢化により「課題先進国」と称される日本の諸問題の解決において、どのような情報化技術やサービスが貢献しうるのか説明する。</p> |

| | |
|-------------|--|
| | <p>第14回(神野)情報化による社会的問題の解決(2) 情報化技術から生み出されるソリューションが、地方創生(再生)やスマートシティの実現に果たすべき役割について考察する。</p> <p>第15回(神野)まとめと今後の課題への対応 全体の講義について総括し、その過程で明らかになった今後の未解決の課題を明確にし、それらにいかに取り組むべきかの指針を提示する。</p> |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | <ul style="list-style-type: none"> ・日常点(出席及び報告・討論への参加状況)60%—出席カードを毎回(15回)配布・回収 ・課題レポート(期中に1回作成して発表)40% |
| 教科書等 | 初回の講義において紹介、説明を行う。(総務省の情報通信白書(無料)を予定) |
| 担当者プロフィール | <p>神野新(株)情報通信総合研究所 法制度研究部 主席研究員)</p> <p>桑原俊(株)情報通信総合研究所 法制度研究部 主任研究員)</p> |
| 授業に関連する実務経験 | 神野はNTT、情報通信総合研究所(社会科学系シンクタンク)に通算39年の勤務、桑原は情報通信総合研究所(同)に10年の勤務経験を有する |
| 備考 | <ul style="list-style-type: none"> ・土曜日に集中講義の形で実施。「4コマ×3日(神野)」、「3コマ×1日(桑原)」の計4日間で15コマを行う) ・上記の「課題についての報告と討論」(第8回、12回)に関しては、各回ごとに同一課題を割り当て、課題レポートを口頭発表する形で実施。全講義を通じて1人に1回割り当てる。 |

| | |
|-------------|---|
| 科目名 | 道具論 |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 教授 吉田 幸弘 ほか |
| 履修時期 | 後期(第4ターム) |
| 履修対象 | 博士前期課程1、2年 |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | 広島から、道具がどのような存在であるかを論ずる。道具存在論、道具が開く文明と文化の歴史、過去と現在、未来論、形態と機能、美意識の国際比較、美術、工芸とインダストリアルデザインとの違いなど、道具を使う立場、つくる立場、考える立場、商う立場にとっての道具のありようの見方を論ずる。 |
| 科目の到達目標 | 人間が生きていく為に、周囲の世界と交わした対話、それが道具である。人間とともに新しい、この道具世界に、いかに対座するかを追求する。 『もの』と人間の精神復興を願い、身の回りの品々をあらためて再考し、生活革新への指針を示す。 |
| 受講要件 | それぞれのテーマごとにその道に造詣の深い専門の講師によりオムニバス形式で授業が行われるので、すべての授業に出席することを特に要望する。 外部講師を招いての講義が多く、講師に失礼にならないよう、私語や毎回の著しい遅刻など受講態度の悪い学生は受講を許可しないことがある。 |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | 栄久庵憲司の著書「道具論」等、出版物を後期中に読むこと。 |
| 講義内容 | 1 栄久庵憲司と広島 2 茶と道具―茶道上田宗箇流 茶の湯の心 3 地域と道具Ⅰ―広島県伝統的工芸品(大竹手打刃物)と安芸十利(針) 4 地域と道具Ⅱ―安芸十利の一つである鑪(やすり)について学ぶ 5 作り手と使い手―日本刀と鍛冶道具 6 道具と都市Ⅰ―都市の視座から道具を考える 7 道具と都市Ⅱ―都市の視座から道具を考える 8 衰退する道具―言霊と文字の象徴・はんこ 9 持続する道具―玉座という王権の空間装置 10 移動する道具Ⅰ―身体と道具のかかわりを具体的事例を交え学ぶ 11 移動する道具Ⅱ―公共空間と道具のかかわりを具体的事例を交え学ぶ 12 生命の誕生と道具の誕生―「自然と不自然」の相関を考察する 13 文明の進展と道具の関わり―「日本の戦後史」から考察する 14 道具と表現Ⅰ―熊野書筆 15 道具と表現Ⅱ―熊野化粧筆 レポート提出 |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | ①授業の理解度を測るため毎回レポートを提出。 ②期末テーマを与えレポートを提出 ①と②の総合評価とする。 ①各授業のレポート 40% ②期末のレポート 60% |
| 教科書等 | なし |
| 担当者プロフィール | 吉田幸弘(広島市立大学)教授 及川久男(元広島市立大学)教授 服部等作(広島市立大学)名誉教授 上田宋岡 茶道上田宗箇流十六代目家元 山田晃三 GKデザイン機構 代表取締役 社長 村田隆志 大阪国際大学 苅山信行 元広島県立西部工業技術センター 高橋康介 マツダデザイン本部 鈴木すばる GKデザイン総研広島 三上高慶 刀匠 |
| 授業に関連する実務経験 | 吉田幸弘 車メーカーで5年間カーデザイン関連の業務を行う |
| 備考 | |

| | |
|-------------|--|
| 科目名 | 都市論 |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | 非常勤講師 杉本俊多, 非常勤講師 水田 丞, 非常勤講師 千代章一郎, 非常勤講師 森本真, 非常勤講師 遠藤吉夫 責任者(吉田幸弘) |
| 履修時期 | 後期(第3ターム) |
| 履修対象 | 博士前期課程1、2年 |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | グローバル化やマルチメディア技術の普及とともに都市はますます不可視となってきた。機械化、ネットワーク化する都市は、他方で生命体としての人間のエコロジー回帰を促してもいる。そもそも都市とは何だったのか、歴史の原点に遡り、かつ未来都市を構想しつつ、また視野を広く地球規模に広げて、世界に知られる都市広島においてこそ論じなければならない、21世紀の都市像とそのデザイン方法について実践事例や現地見学を含めて講じる。 |
| 科目の到達目標 | 建築デザイン、都市デザイン、まちづくりの観点から、都市の解釈方法、デザイン方法を理解する。都市空間の構成について理解し、将来の都市デザインに向けて、ポキャブラリーや思考方法を習得する。 |
| 受講要件 | 特になし。 |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | 各講師の指示・推薦する文献等を読み、講義内容と合わせて理解・思考を深めること。 |
| 講義内容 | 第1回 吉田 イントロダクション・広島のみちづくり1 第2回 吉田 広島のみちづくり2・現地講義 第3回 杉本 広島都市空間形成史 第4回 杉本 近代広島都市空間 第5回 杉本 ベルリン都市空間形成史 第6回 杉本 ベルリンに見る現代都市空間デザインの課題 第7回 千代 ル・コルビュジエの都市論 1 第8回 千代 ル・コルビュジエの都市論 2 第9回 水田 現代都市・建築空間 1 第10回 水田 現代都市・建築空間 2 第11回 遠藤 広島建築 1 第12回 遠藤 広島建築 2 第13回 森本 他都市圏の建築・エクステリア 第14回 森本 他都市圏の建築・インテリア 第15回 吉田 まとめ |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | 講義終了後、レポートにより評価。 |
| 教科書等 | 講義形式: パワーポイントまたはキーノートを用いて講義。 テキスト、参考資料は各担当講師が指示ないし配布する。 |
| 担当者プロフィール | 杉本俊多(広島大学大学院工学研究院社会環境空間部門教授 建築史・意匠学) 水田 丞(広島大学大学院工学研究院社会環境空間部門助教 日本近代建築史) 千代章一郎(広島大学大学院工学研究院社会環境空間部門准教授 建築史・意匠学) 遠藤吉夫(広島工業大学環境学部建築デザイン学科 准教授) 森本真(武庫川女子大 准教授) 吉田幸弘(立体造形 教授) |
| 授業に関連する実務経験 | |
| 備考 | 一部広島市内中心部での現地授業があります。 |

| | |
|-------------|---|
| 科目名 | ヒロシマと核の時代 |
| 単位数 | 2.0 |
| 担当者 | Robert Jacobs and guest speakers |
| 履修時期 | Spring Semester |
| 履修対象 | 1st and 2nd year students. Master's Program |
| 講義形態 | 講義 |
| 概要 | To learn about nuclear history from many different vantage points. Students will learn about the history of the nuclear attacks on Hiroshima and Nagasaki, subsequent nuclear weapon developments. Then students will learn from numerous guest speakers on Peace Culture in Hiroshima, and also on perspectives about the attacks on Hiroshima and Nagasaki from the vantage points of numerous countries in the region and globally. |
| 科目の到達目標 | To understand the complexities of the Nuclear Age both from the perspective of Hiroshima and also the rest of the world |
| 受講要件 | All lectures and reading materials will be in English. Students must have a competent reading and discussion ability in English. |
| 履修取消の可否 | 可 |
| 履修取消不可の理由 | |
| 事前・事後学修 | Read all the materials before and after attending the class and actively participate in all class discussions. |
| 講義内容 | <p>Tentative Schedule: Section 1 History of Nuclear Weapons including Hiroshima & Nagasaki: Dr. Robert Jacobs 1. The Manhattan Project and the bombing of Hiroshima and Nagasaki 2. The development of nuclear weapons since 1945 3. The history of nuclear weapon testing around the world 4. Nuclear colonialism and global hibakusha 5. The nuclear Anthropocene</p> <p>Section 2 Hibakusha: Experience of Hiroshima and Nagasaki 6 Hibaku taiken (Atomic Bomb survivor's experience) 7 Hiroshima seen from the Eyes of Experienced Guide and Interpreter in Hiroshima 8 Issues of Korean Victims in Hiroshima and Nagasaki 9 To cultivate the Truth and report as TV documentary 10 Effort to Convey the experience</p> <p>Atomic Bomb Legacy Successors (Hiroshima City has been cultivating successors since the FY 2012 to pass down the survivors' stories and wishes on their behalf. The first A-bomb Legacy Successors completed a three-year training course and started their activities in the FY 2015.)</p> <p>Section 3 Dialogue and Discussion with Specialists on "Hiroshima" 11 Korean View on Hiroshima 12 German View on Hiroshima 13 Chinese View on Hiroshima 14 US Media and A-bombing 15 Final review</p> |
| 期末試験実施の有無 | 実施しない |
| 評価方法・基準 | Attitude at class such as discussion and presentation (40%), and the final project paper (60%) |
| 教科書等 | No text book. Reading materials will be given at the class. |
| 担当者プロフィール | Robert Jacobs is a professor working on the social and cultural aspects of nuclear technologies. His work focuses on the experiences of radiation exposed populations, and the representation of nuclear technologies in culture and art. |
| 授業に関連する実務経験 | |
| 備考 | |